

～予定調和を超えて、「かけあい」（Call and Response）が生む、もう一つの成果～

はじめに

技術協力プロジェクトは、一般に PDM（Project Design Matrix）と呼ばれる論理的枠組みに基づいて設計される。PDM は、活動、成果、目的、最終目標の階層を論理的に整理し、指標とともに可視化することで、関係者間の共通理解を促し、プロジェクトの進行と評価を可能にする。JICA をはじめとする技術協力においても、PDM はプロジェクトの「設計図」として、極めて中心的な役割を担っている。とくに JICA の技術協力プロジェクトでは、パートナー国の制度・組織・人材の能力強化を通じて、対象分野の持続的な発展を支援することが基本的な目的とされている。技術移転や制度整備といった「計画された協力」を通じて、相手国自身が自立的に課題に取り組む力を育む。その意味で PDM は、協力の論理と道筋を明示するツールであると同時に、プロジェクト全体の「骨格」ともいえる存在である。

しかし、実際のプロジェクト現場においては、PDM に描かれたとおりに事が運ぶとは限らない。むしろ、現場に足を運び、関係者とかかわりながら進めるなかで、当初の想定にはなかったやりとりや応答が次々と生じてくる。技術協力の現場は、生きた人間の相互作用と日常のなかに置かれており、そこでは協力の内容そのものが、相手とのやりとりの中で練り直され、再構築されていく。そうした現場の動態をとらえるうえで有効な視点が、「かけあい」（Call and Response）である。ここでいう「Call」とは、プロジェクトを担う日本人専門家が発する呼びかけである。たとえば、新しい栽培技術、普及手法、組織運営の枠組み、あるいは農村女性のエンパワーメントに関する概念など、多くの「問いかけ」が相手国の現場に投げかけられる。そしてその「Response」は、途上国の普及員、農家、農村女性たちによって、各々の状況に即した形で返される。その応答は、技術の応用や再解釈、既存の知恵との融合など、多様なかたちを取りながら、計画には記されていなかった「協力の内容そのもの」を豊かにしていく。

こうした「かけあい」の繰り返しは、プロジェクトの実施過程を一方向的な「活動の実行」ととどまらない、対話的・創造的な場へと変えていく。知識や技術が、単に「導入されるもの」ではなく、参加者の生活実践のなかに位置づけられ、自らの意味づけとともに活用されるようになる。つまり、技術や考え方が「内在化」され、さらに地域の資源ややり方と結びつけながら「内製化」される過程がそこにある。このようにして協力が深まっていくなかで、当初の成果指標や活動枠には収まりきらない、おもいがけない展開が生まれることがある。それが本シリーズで注目する「スピンオフ」である。スピンオフとは、プロジェクトの終了後または中長期的な展開のなかで、参加者自身の発想と行動によって生まれる、新たな活動や実践である。それは PDM には記されていないが、プロジェクトで得られた知識・経験・人間関係が、参加者の内側に根づいた結果として生まれたものである。

スピンオフは、計画された成果ではないが、計画の延長線上にある「副産物」でもない。むしろそれは、協力が本当に意味あるかたちで地域に根づいたこと、そして、相手の側に変容と創造が生じたことを示す、協力の深化形態であると言える。技術協力の価値を PDM 上の数値や進捗だけで測るのではなく、こうした現場からの自発的展開も含めてとらえ直すことが、これからの協力の実践にとって重要な視座となるのではないか。

本シリーズでは、こうした観点に立ち、われわれがこれまでに経験したいくつかの技術協力プロジェクトにおいて現れたスピンオフのプロセスを検討する。そこに共通するのは、「かけあい」のなかで芽生えた人びとの変化と、新たな意味づけに基づく自発的な行動である。それらの事例を丁寧に読み解くことで、「予定調和を超えて」現れるもうひとつの成果と技術協力が残す本当の価値について考察したい。